

障がいを持つ人たちの山形・福島地域間交流会 開催しました！

朝日町立病院 作業療法士 清野敏秀

2017年6月10,11日、山形県の朝日町立西部公民館を主会場に、「障がいを持つ人たちの山形・福島地域間交流会」を開催しました。

福島県の会津と二本松の間で開催された地域間交流会がとても良かったと話を聞いていたもので、機会があれば福島の方たちと交流会ができれば良いなあと、考えておりました。

私の勤務する朝日町立病院でも、通所リハビリテーションを行っております。利用者の皆さんは、自分がやりたいことができるように、やりたいことを継続して楽しめるようにと利用されております。交流会を通して、離れていても同じ立場の仲間がいること、仲間の姿から刺激を受けること、障がいがあっても楽しく交流できること、そんな交流会になればと思いました。当日までに2回ほど、会津や二本松の当事者と協力者数名から朝日町にお出でいただき、打合せと懇親を深め準備を進めました。

交流会の1日目は、当事者パフォーマンスとして、自分が住んでいる地域の紹介や自身の活動、得意技の披露、2日目に行われるスポーツ体験のプレゼンテーションを行っていただきました。終了後、ホテル自然観に場所を移動して、懇親会を行いました。和やかで楽しい雰囲気がとても良かったです。

2日目は、グラウンドゴルフやスポーツ吹矢、フライングディスク、絵手紙体験コーナーで、好きな活動を体験できるようにしました。また、協力者でそば打ちを行い、昼食に振舞いました。そば打ちの体験や天ぷら揚げを行ってくれる当事者もおられ、みんなが参加し、みんなで作り上げることができました。

閉会式では「花は咲く」や「故郷（ふるさと）」を合唱し、再会を誓い合って終了となりました。今回は、当事者と家族、協力者あわせて70名の方に参加していただきました。障がいの有無に関わらず、集まって交流の場があることで、自分たちからいろんなことができるなあと、感じた次第でした。



次回日本脳損傷者ケアリング・コミュニティ学会全国大会
2018年7月7・8日 ビッグハート出雲(出雲市駅から徒歩2分)
大会長：高橋 幸男(エスポアール出雲クリニック)

交流会参加者感想

会津若松市 白川玲子

私は、平成 29 年 6 月 10 日、11 日の交流会で初めて出会う山形の方々、そして再会の二本松の方々とたくさんの期待を持って参加させていただきました。



まずは、何よりも終始温かくアットホームな雰囲気の中で楽しく過ごさせていただきました。今回は少し遠くの場所なので少し不安でしたが、往復の移動も快適で何の不安もなく、安心して移動できてむしろ楽しいドライブでした。多分支援者の皆様は前々から計画や下見などのご苦勞があったと感謝しています。また、朝日町の方々の街を挙げてのご協力と温かいおもてなしで細々と気配りと笑顔にすべて満足でぜひまた伺いたいと思いました。

一年ぶりの再会の二本松の方々も元気でいろいろ活動している様子で本当に良かったと思いました。交流会の内容も素晴らしくて、進行もスムーズで楽しく、あっという間の 2 日間でした。

体験談はいつものことながら他人事とは思えず、大変良い参考になりました。私は事故の後遺症で右半身の自由と記憶を失い、また勇気と自信も一緒に失いました。いつも自分ばかり大変だと思っていることが多かったのですが、私よりも大変な人がたくさんいること、そして、自分ばかり頑張っていると思っていたが、もっともっと頑張っている人がたくさんいることを、今回も思い知らされました。でもこれが一番の収穫だったと思います。

最後に、せっかく良い会が皆様の協力でできました。これからも何らかの形で継続できたらと期待しています。私にも何かできることがあれば何でも協力したいと思っています。失った自身と勇気を取り戻すためにも……。本当にありがとうございました。



第7回日本脳損傷者ケアリング・コミュニティ学会北海道帯広大会を終えて 菅谷智鶴

2017年6月10、11日、北海道帯広市で第7回大会が開催され、全国から約230名の方に参加いただきました。皆様のご協力のもと大盛況にて終えることができ、心より感謝申し上げます。

総合司会を当事者が務め、他にも当事者が重要な役割を担ってイキイキと活躍する姿は参加の皆様より、「何だか心が温かくなった」「今までの支援の在り方を考えさせられた」など、多くの声をいただきました。人と人がつながり、仲間になって、一緒に考えることは、私たちが主体的に行動しようとする背中を押す力になっていくことを確信した一年でした。大会開催で終わりではなく、この財産を地域で活かしていくべく、今後も取り組んでいきたいと思っております。皆様から頂きましたご感想を下記に掲載いたします。



- ・発症してからの思いを直接聞くことができ、考えさせられた。
- ・他の障害の方の、表面的には分からない胸の内、本音が聞けて、とても勉強になりました。
- ・高次脳機能障害が、百人百様であることがわかり、安心しました。
- ・私以上に大変な思いをした人や、いろいろな考えを持っている人がいることをあらためて理解できました。
- ・援助→障害者という一方向ではなく影響しあいつつ、支え合う、学び合う関係が、ケアリングで、そこには健常者・障害当事者の線引きの無い、とてもナチュラルな環が描かれていると感じました。すべての人が同じテーブルで語り合う双方向のコミュニケーションが、外へ向かって開いている、それが心地よいバイブレーションを生み出している気がしました。
- ・大会終了後、風が吹き抜けたような、心の角がとれたような、そんな気持ちになれました。
- ・涙が出た・・・本当は障害者になっても楽しく、と言うより、障害者の方からエネルギーをもらって、私達（障害の無い者）が元気になって行く社会だと思っている。
- ・ポスター発表では、直接討論することができ、良かった。
- ・様々な活動を知れて良かった。



<学会関連団体活動紹介>

NPO 法人日本脳卒中者友の会

理事長：石川敏一（当学会副理事長）

全国各地の病院患者会 OB 会やリハビリ教室を母体とした脳卒中者友の会活動を始め、平成 9 年 5 月に「全国脳卒中者友の会連合会」が発足、平成 18 年 9 月に NPO 法人として認証されました。さらに平成 25 年 5 月「日本脳卒中者友の会」に名称を変更し、会員には団体会員および個人会員の当事者とその他家族会員を含め約 3000 名になります。全国大会の開催やピアカウンセラー認定リーダー研修会等を実施し、情報活動・機関誌発行・ホームページやフェイスブックなどで発信しています。

現在の課題は各地の友の会に当事者活動するメンバーの減少、リーダーの高齢化に伴い核となる友の会が激減している事です。介護保険制度導入に伴い、在宅脳卒中者の友の会離れが進んでいる事も一因と考えています。当会では個人会員の増加、地方支部の充実、ボランティアなど多くのサポートの導入に取り組んでします。脳卒中は中・高齢で発症する為、加齢も課題となります。今後、特にリーダー候補者として比較的若い脳卒中者の参加に期待するところです。

<イベント・研修会案内>

失語症全国大会インいわて ～2017年11月4日開催～

大会長 堀間力夫 実行委員長 佐藤誠一

全国の失語症友の会の皆様、関係者の皆様、このたび NPO 法人日本失語症協議会と NPO 法人失語症デイ振興会の共催により、岩手県盛岡市で失語症全国大会を開催することになりました。今大会は、「東日本大震災から7年、さらなる復興を目指して失語症のある人が元気に暮らせる街をつくろう LIVING WITH APHASIA IN OUR COMMUNITY」というテーマを掲げ、被災地から全国の皆様にメッセージを届けたいと思います。被災を乗り越えて岩手、宮城、福島で元気に暮らしている失語症のある方3名の体験発表と震災を機に生まれた被災地の失語症友の会の紹介、また、脳梗塞を経験された関啓子先生、国際失語連合イギリス大会に出席された吉野真理子先生、そしていつも私たちを応援して下さっている大田仁史先生による講演、さらに当事者や地域活動を実践されている方たちによる「これからの失語症のある人のための地域支援を考える」というテーマのシンポジウムなどのプログラムを企画しました。制度が目まぐるしく変化しているこの頃ですが、失語症のある人が決して孤独になることなく、一人ひとりに相応しい生活を送ることができる地域づくり・街づくりを皆様と一緒に考えていきたいと思っております。被災地に足を運んでいただくことがなよりの復興の励みです。全国の皆様、ぜひ岩手にいらしてください。皆様のご参加を心よりお待ち申し上げて、ご挨拶とさせていただきます。



失語症全国大会インいわて実行委員会
【事務局】

デイサービス言葉のかけ橋 担当: 佐藤

☎ 019-651-1017

Fax 019-651-1023

d.s-kotoba@coral.plala.or.jp

www.japc.info/japc_11-3.htm

書籍紹介

「脳卒中を生きる意味～病いと障害の社会学～」青海社、細田満和子著

本書は、中年期に脳卒中を発症した方々の声を聴き取り、その後の人生をいかに創り上げていったかを記したものです。突然、病いや障害を持つようになって、多くの方は「絶望」に陥りますが、再び「希望」を持って<生きる>という方向に向かっていきます。その過程には、互いに互いを必要とし、支え・支えられる他者との「出会い」による、主体の「変容」が見受けられます。医療専門職や学生、さらには当事者やご家族にも、ぜひ読んでいただきたいと思っております。

「まさか、この私が 脳卒中からの生還」教文館、関啓子著

脳卒中リハビリの専門家として治療する立場にあった著者（言語聴覚士）が、発症から職場復帰までの体験を克明に記した貴重な記録です。倒れた時に本人はどういう状況で、何を必要としているのか、リハビリの時に周囲はどのようなサポートをすればよいのか、等、具体的にわかりやすく説明しています。誰もがもっている発症の可能性にいかに備えるか、また身近な方のリハビリにどのようにサポートするか等、読んでおくと役立つことがたくさん書かれています。

編集後記：ALS(筋委縮性側索硬化症)をご存知ですか。全身の筋肉が少しずつ衰えていく難病です。16年前、私もALSのドキュメンタリーを医者と患者と一緒に取材しました。Mさんの記事を新聞で読みました。記事によれば「それ以上の医師の説明は頭に入らなかった。病室を出ると付添の両親が無言で背中をさすってくれた。涙があふれた。仕事も夢もあきらめなきやいけないのだ！そこで残りの人生でも同じことを続けることが使命と腹に決めた」外出のために電動車をレンタルすることにした。電動車は高額のためらう人も多く、レンタルなら利用者もいると見込んだ。若者の患者を引き付けようとデザインが売りの業者に協力を求めた。資金集めは、1ヶ月程で目標額を集めた。手が使えなかった、歩けなかった、声が出せなかった、障害のある人の気持ちが痛いほど分かった。「障害者の立場を想定できる健常者が増えれば、両者の垣根は低くなる。そのためにも障害者ももっと表現してほしいと思う。自分がその架け橋になりたい」障害者に対する理解がますます広がれば良いと思っております。

(菊地春夫)